

## 1. 隣県の口蹄疫発生に伴う防疫対応

豊後大野家畜保健衛生所

○山岡達也、里秀樹、梅木英伸、芦刈美穂、(病鑑) 甲斐貴憲  
渡邊春香、山本史子、廣瀬英明、野々下雅彦、赤峰正雄

### 【はじめに】

2010年4月20日、10年ぶりに口蹄疫が国内に発生し、当家畜保健衛生所（以下、家保）は、発生県に隣接した3市を管轄する家保として最前線で防疫対応を実施した。今回、口蹄疫ウィルスの侵入を防ぐ対策や発生に備えた防疫演習等、実施した一連の防疫対応について報告する。

### 【防疫対応】

4月21日、関係機関を集めた地域情報連絡会議を開催し、正確な情報の周知、異常家畜の早期通報を徹底を図った。以降、情報の周知と早期通報に努める一方、疫学関連農家の調査、通報にともなう立入を実施した。

4月30日から、3市906戸の牛、豚、その他偶蹄類飼養農家に対して、消石灰等消毒薬を14か所で関係機関と連携して1日で配布し、緊急消毒を実施。

5月11日から、県境2か所に消毒ポイントを設置して動力噴霧器による畜産関係車両消毒を開始。その後ポイントを増設し、最終的には畜産関係車両消毒を3か所、プール方式またはマット方式による一般車両消毒を9か所で実施した。業務は、ペストコントロール協会及び大分県警備業協同組合に委託し、消毒期間は82日間、延べ消毒台数401,781台となった。

### 【防疫シミュレーション・県防疫演習】

6月中旬、発生拡大にともない2市において防疫シミュレーションを実施した。市と県機関で県防疫がトラインに沿った作業班の編成、時系列の作業確認等をおこない、発生時の迅速な初動防疫体制が確立した。これにより、9月8日に管内で157名を動員して県防疫演習を実施した。埋却処理等迅速な初動防疫がおこなわれたが、各作業班間の総合調整に課題が残った。

### 【メンタルヘルス】

口蹄疫対応を振り返り、メンタルヘルスについて当家保家畜防疫員10名にアンケートを実施した。発生がなかった本県において、今回の対応で8名が「発生不安」「発生対応」等にストレスを感じたと回答。防疫対応でリーダーとなる家畜防疫員へのストレス軽減にトラインの充実、演習は必要と思われた。

### 【まとめ】

口蹄疫発生地隣県での防疫対応には、口蹄疫ウィルス侵入防止のため、早急な消毒ポイントの設置と緊急消毒が必要であり、発生を想定した訓練と事前準備が初動防疫対応の重要ポイントと考えられた。しかしながら、防疫対応における各関係機関との役割分担、指揮命令系統の分散は作業調整を複雑にする課題も残した。何よりも発生県からの詳細な対応報告が待たれるが、今回の対応を今後の防疫対策に生かしていきたい。